

0.1℃の砦

全国小中学校環境教育研究会 会長
東京都多摩市立連光寺小学校 校長

關 口 寿 也

第55回全国小中学校環境教育研究大会を4年ぶりに対面で実施することになりました。3年間続いたコロナ禍は、私たちの生活に大きな変化をもたらしましたが、そこに輪をかけて2年続けたの暑さに、実感としての確かな異変を感じた方も多かったのではないのでしょうか。

昨年は太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなるエルニーニョ現象の年で、日本では冷夏になるのが定説でした。米を初めて輸入する事態となった大冷夏の1993年もまさにその年です。ちなみに1993年の真夏日は18日。猛暑日はありませんでした。これまでの真夏日の記録は、2010年の71日、次点は2004年の70日。次は2022、2018、2012年の66日です。2010年代以降の急激な温暖化が如実にかがえる数字です。では昨年はどうだったかということ、真夏日は90日の記録更新の嬉しくない年でした。2000年代以降の気温観測の統計方法の変更を加味したとしても驚くべき突出した記録の上書きでした。IPCCの第5次報告書(AR5)をもとに、環境省が作成した「2100年の天気予報」では、温暖化対策が進まなかった想定で、東京では真夏日が107日になると予測していましたが、その数字ももはや過小評価であったと感じざるを得ません。

そんな真夏日がようやく収まってきたことと時を同じくして、英国南極観測局の研究チームは2018年にIPCCから出された特別報告書にある気温上昇を1.5℃に抑えたとしても、南極の棚氷が融解していくという結果を導き出しました。海面が最大5.3m上昇する量であるとの報告以上にショッキングであったのは、ティッピングポイントに至ってしまった可能性があるということでした。それは温室効果ガスの排出を今すぐにゼロにしても温暖化が進行してしまうことを意味し

ています。10月に米国の研究者たちがまとめた2023年の「気候変動報告書」でも、今夏の世界的猛暑が地球の過去10万年で最も暑かった可能性があると、地球が「未知の領域」に入っていると指摘しています。また、ドバイでのCOP28の直前、世界気象機関(WMO)は、10月末までの記録では世界の平均気温が1.4℃上昇していると発表しました。「1.5℃の約束」にあと0.1℃しか残されていないこととなります。

気候危機を象徴するかのような昨年、様々な研究機関が警笛を鳴らしています。国連のグテーレス事務総長が7月末の記者会見で「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が来た」と述べましたが、実感として「ついに後戻りできないところまでできてしまった」と冷や汗が出る感覚だったのは私だけだったのでしょうか。あまたの歌にうたわれた甘美でノスタルジックな夏を、子供たちはもう経験できなくなっています。そして、今以上の過酷な状況に人類はひた走っています。教育界に身を置く私たちは、気候危機を回避するわずかであるかもしれない可能性を信じ、気候変動教育(CCE)を行っていく必要があります。答えの見えない壮大な学びです。そこには、教師自身が変容し、ESDをもって子供たちが探究的な学びを深めることで、未知の課題に講じうる人材育成を進めるより外ないことは明らかです。熱意や心意気を超えて、あらゆる場で、あらゆる手段で、あらゆる形で、郷土を愛し、SDGsに資する、明日の地球を創造する教育に私たちとともに手を携えていきませんか。0.1℃の砦の上で。

第55回全国小中学校環境教育研究大会が、私たち人類が抱える様々な問題に危惧を抱くみなさんの一助となれば幸いです。

各支部の活動報告

北海道・東北支部報告 1

ワールドピースゲームを実施して

秋田県大仙市立大曲南中学校 校長 島田 智

皆さんは「ワールドピースゲーム」をご存知だろうか。答えのない問いに向き合い解決を目指す姿勢、深い思考力、交渉力、決断力、協働する力など、これからの社会に必要とされる大切なスキルを身に付けることができる、世界の課題解決型シミュレーションゲームだ。仮想の4カ国と国際機関のグループに分かれ、5日間で23のクライシスを全て解決し、かつ全ての国の資産が増えていることが勝利の条件となる、壮大なゲームである。

本校では、昨年度3年生29人を対象に実施した。仮想各国には首相や環境大臣等の役職があり、生徒たちは自分の職責を果たしつつ交渉と宣言を繰り返し、複雑に絡み合ったクライシスを一つ一つ解いていく。内容の理解が不十分でも、判断が間違っているとしても、容赦なく進行していくゲーム。全てのクライシスを解決できるだろうかという猛烈な不安。2日目終了時点で、生徒たちから笑顔が消える。しかし、そこで助けてくれる人は誰もいない。ファシリテーターでさえアドバイスはしない。逆にトラップを仕掛ける。周りの先生たちも助言が禁止されている。思考も交渉も判断も実施も、全ては生徒たち自身に託され、自分たちで解決するしか道はない。生徒も先生も、今までこんな経験はしたことがない。自分の責任の重さに耐えかねて体調を崩し、一時保健室に退避する生徒も出た。しかし、3日目、4日目、生徒たちはこれまでに見せたことのない力を発揮して、どんどんクライシスを解いていく。「何なんだこの子たちは」周りの先生たちが驚愕する。終了後の生徒の振り返りには「各国の思想や資産は違っても、それぞれの問題の話合いに積極的に参加し、武力はなるべく使わないで、世界がひとつになって考えていくことが大切だということが分かりました。」「世界の問題を解決するのは『話合い』です。今現在起こっているのは武力解決です。それは本当によいやり方なのか、解決の方法はそれしかないのか、今一度武力的行使をしている人たちに考え直してほしいです。」とあった。自分たちの力だけで、この境地に達した生徒たち。これまで私たちは「子どもの本当の力を、『教える』ことによって埋没させていたのかもしれない」と思えた5日間だった。

<http://worldpeacegame.jp/>

北海道・東北支部報告 2

森・川・海の水と命のつながりから 環境を考える子どもたち

宮城県気仙沼市立鹿折小学校 校長 小野寺 裕史

本校は、教育課程特例校の指定を受け、特設領域「海と生きる探究活動」を教育課程に位置付けている。この教育課程は、海洋教育を取り入れた探究的な学習であり、海と生きるまち・人としての育てたい資質・能力を海洋リテラシーと関連付けて設定している。

「海と生きる探究活動」は、3～6学年に設定されており、低学年で育んだ「海や自然に親しむこと」をベースに、『海と生きるまちの宝』『山・川・里・海の水と命』『世界につながる気仙沼の海と水産業』『海で復興～気仙沼の魅力発信プロジェクト～』と学びを進め、持続可能な未来のために、残し繋げていきたいこと、そのために課題になることを考え、自分たちにできること、社会全体でしていくことの提言をする流れとなっている。今回は、4年生『山・川・里・海の水と命』の学習を例に、環境を考える子どもたちについて紹介する。

4年生は、まず、鹿折川の上流域に出向き、宮城教育大学の棟方先生の協力を得ながら、生物調査と



水質調査を行う。その後、下流域に行き、同様の調査を行うことで、流域によって生物が違ったり水質が異なっていることを知る。

この違いから、子どもたちは、自分の「問い」を作り出し、それぞれが設定した探究課題に沿って学習を進めている。

ある児童は、川の水が海の生き物に影響を与えることを懸念し「川の水質を守るためには？」というテーマを設定した。また、別な児童は、気仙沼の酒造会社が使う水に着目し「おいしいお酒をつくるための水とは？」というテーマを設定した。それぞれの問いから始まる探究は、身近な場所にある水が命をつなぐものであることへの気づきにつながっていくものである。



このように、海と生きる気仙沼の未来を考えながら、身近な地元の事柄から調べ、考えることにより、地球にあるものがつながりあって環境が変化していることを捉え、人間の関わりも大きいことを学ぶことにつながっている。

身近な環境を生かし、 主体的に取り組む子どもの育成

滋賀県小学校教育研究会 環境教育部 会長
滋賀県守山市立中洲小学校 校長 長田 光広

滋賀県は、母なる琵琶湖を田園、山並みなどが取り巻く豊かな自然に恵まれ、自然と共生する文化が育まれてきました。「滋賀の教育大綱」の中で、「滋賀ならではの学び」として、自然、歴史・文化等を大切にする学びや、地域、企業等と連携した学びにより、地域に誇りと愛着をもち、主体的に地域の課題を解決する行動力を育むことをめざしています。

長年にわたり取り組んできている「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」事業は、本県の環境を最大限に生かした学習で、それぞれ「琵琶湖環境学習」、「森林環境学習」、「農業体験学習」をさします。これらは、県内のほとんどの学校で教育課程に位置づけられ、大きな成果を上げてきています。特に、複数校の児童が学習船「うみのこ」に乗船し、交流を深めながら、琵琶湖の水の透視度調査、湖底の生き物やプランクトンの観察、島々の探訪や寄港地での活動などを通して琵琶湖やその周辺の環境・文化に親しみ学ぶ「びわ湖フローティングスクール」は、コロナ禍以前に戻り、1泊2日の日程で実施されるようになり、再び充実した活動の展開が図られているところです。

また、本部会では、毎年、夏に現地研修会を、秋に研究発表大会または実践交流会を開催しています。今年度は、研修会、研究発表大会ともに守山市で開催しました。守山市では、市に新設された環境学習施設を活用したり、市の環境学習の充実・発展のために配置された「守山市環境コミュニケーター」と連携したりしながら、各校の課題や地域の状況、身近な自然や環境を踏まえた環境学習が工夫されており、実践報告や公開授業、記念講演などを通して学び合いました。

また、年度末には県内各市町の実践事例を集めた「滋賀県の環境教育」を編集発行し、実践を交流し、各市町や各校の取組の充実を図っています。

これらの取組を通して「持続可能な社会の実現に向けて主体的に行動できる人づくり」を推進しています。

学校ビオトープから、 環境教育の推進を図る

埼玉県越谷市立大袋東小学校 校長 鈴木 秀明

本校は越谷市北部の新興住宅街に位置し、学区内には梅林公園、宮内庁管理の埼玉鴨場があり、沈淪の自然環境は比較的豊かである。校内には、約900㎡のビオトープがあり、授業の中で動植物や昆虫と触れ合ったり観察したりする活動が容易にできる貴重な場となっている。

本校が目指すビオトープの目標像は以下の3つである。

- ①児童の感性をより豊かにするビオトープ
- ②課題解決のための実践力を養うビオトープ
- ③友達との協調性をはぐくむビオトープ

<ビオトープと児童とのかかわりについて>

- ◎5年 総合的な学習の時間「MIB（もっといきいき ビオトープ）」40時間
- 1年 生活 ビオトープにある材料の活用
- 2年 生活 ザリガニ
- 3年 理科 自然の観察 昆虫
- 4年 理科 季節の移り変わり
- 5年 理科 流れる水の働き
- 6年 家庭 自然の涼しさ
- 総合 環境教育の総まとめ

<保護者や地域とのかかわりについて>

- 埼玉県生態系保護協会
管理・活用・整備についての助言
- 人と自然の研究所
生き物調査のゲストティーチャー
- 本校おやじの会
橋の改修や枝打ちや伐採など

<環境づくりの留意点として>

その土地本来の生き物が根付くことが重要である。そのため、児童が在来種について調べる時間を設け、環境に大きな影響を与える外来種を取り除く必要性を理解したうえで、活動している。

最後に、ビオトープを活用することで、授業の内容に深みが出ている。また、児童の心の育成にもつながっている。今後は施設内の老朽化対策をしっかりと行い、環境教育を推進していく。

豊かな心を育むための 環境教育に向けて

千葉県教育研究会 環境教育部 会長
千葉県印西市立高花小学校 教頭 小島 実

新型コロナウイルス感染症も5月に5類感染症に位置付けられ、社会情勢、経済活動ともコロナ前へと戻りつつあります。そんな中、学校でのあらゆる活動もコロナ前に戻り、保護者の方々が学校へ足を運べる機会も増えてきました。制約のあった期間ですが、これを機に大胆な見直しや改善を測れた行事や活動も見られ、決してマイナス面ばかりでは無いと思われまます。

それに伴い、千葉県内の環境部の活動も動き出しました。対面式の支会長会議も4年ぶりに開催されました。県内の各支会の取り組みを報告し合いました。学校全体で身のまわりの自然環境と関わる教育活動の報告、他教科との関連を意識した環境教育の実践報告、身近な問題からグローバルな視点で環境問題を捉えていく実践事例など様々な取り組みの報告がありました。

暑かった夏、観測史上最高の月間平均気温を7・8・9月と記録しました。深刻な温暖化を肌で感じられました。また、紛争や戦争が世界各地で絶えることなく起こっております。我々を取り巻く諸問題は、世界とつながっていることを多くの場面で実感させられます。未来を切り開く子ども達にそうした状況だからこそ環境問題を切実なものとして捉え、10年後、20年後、そしてその先の地球環境に対しても目を向けさせていきたいと考えます。

さらに教員の確実な知識・指導力を高めながら、今後の環境教育に取り組んで参ります。

【研究員による自然観察会】



多摩川ガサガサ探検学習の 取組について

神奈川県環境教育研究会 会長
神奈川県川崎市立平間小学校 校長 佐川 昌広

今回は、川崎市で行われている多摩川ガサガサ（干潟で行う際はガタガタ探検と呼んでいる）探検学習について紹介したい。川崎市の場合、市を挟む多摩川水系と鶴見川・矢上川水系の両方で行われていて、川の生物や自然の豊かさを知り、環境保全の大切さを学ぶというものである。更には、昔の汚染された川から蘇った世界に誇ることのできるアユの遡上する再生された都市河川として、シビックプライドを育むこともできる。

やり方としては、①総合的な学習の時間等の授業として位置付ける②教科等横断型授業の中に位置付ける（低学年は町探検やヤゴ採り・中学年は社会科の上下水道や先人の働き・高学年は理科の流れる水のはたらきや社会科・理科の自然環境等）③防災教育と関連付ける（川の災害対策が重要視されているのでガサガサ探検学習の必要性は大きい）④SDGsと関連付ける（河川や生物多様性の場合には目標15「陸の豊かさを守ろう」・干潟や海洋プラスチックごみの場合は目標14「海の豊かさを守ろう」・親水性から目標11「住み続けられるまちづくりを」・川崎カーボンゼロチャレンジを目指す観点から目標13「気候変動に具体的な対策を」）等が挙げられる。

ガサガサ探検学習が成功している学校は、複数のステークホルダーを味方につけている場合が多い。例えば、一度川に入った大人は必ずガサガサのとりこになるので、PTAや学校運営協議会の方々にお手伝いをお願いしている。川崎市では夏の教員ガサガサ研修を主催してくれている市教育委員会や市環境局、NPOや企業も味方になっている。更には、河川漁協・釣振興会・水族館・旅行会社等と連携すると、講演授業・生物飼育やライフジャケット等の用具・バス輸送・休憩場所等でご協力いただけることもある。

今後の展開としては、川崎市内の学校だけでなく流域として広くとらえて、大田区・世田谷区・狛江市・多摩市・八王子市等の東京都の自治体の多くの学校とも連携して、子ども同士が情報交換したり、交流したりしていければと考えている。

充実した研究会活動

東京都小中学校環境教育研究 会長
東京都調布市立上ノ原小学校 校長 箱崎 高之

東京支部では、新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行したことを受け、コロナ禍以前と同様の研究会企画運営、授業研究、研究成果の普及啓発を行っています。主な事業は以下のとおりです。

(1) 研究部

研究部会では、研究テーマを「地球温暖化防止について考えさせる授業」とし、環境教育やESDを推進するための学校経営や授業の在り方について検討し、発達の段階に応じた学習活動のねらいや方法を研究しています。

(2) 第59回東京都小中学校環境教育研究発表会

令和6年1月26日に第55回全国小中学校環境教育研究大会と合わせて実施する予定です。4大会ぶりに対面での発表会となります。ご講演では、東京大学未来ビジョン研究センター教授 江守正多氏をお招きし、「気候危機にどう向き合うか」をテーマとして参加者とのディスカッションを交えてお話を伺います。



(3) 研修会

・御岳山自然観察会(8月4日)

自然ガイドとして活動されている宮田浩先生を講師に迎え、東京の山間部に生息する哺乳類からのメッセージというテーマで、御岳の自然環境について学びました。

・リサイクル見学会(8月8日)

さいたま市桜環境センター、東洋製罐(株)埼玉工場を見学し、リサイクルの意義、スチール缶の特徴などを学びました。

・小学校教員向け環境教育研修会

東京都環境局が毎年夏季に企画している小学校教員向け環境教育研修会「やってみよう!環境教育プログラム」の1講座を研究会の副会長、研究部長、研究員の3名で担当しました。「今さら聞けないSDGs～学校の中での推進～」と題し、学校教育活動の中にSDGsの視点をどのように生かしていけばいいのかという内容で行いました。

◆研修報告1◆

御岳山自然観察会報告 ～東京の山間部に生息する 哺乳類からのメッセージ～

青梅市立第七小学校 校長 森田 哲生

8月4日(金)に青梅市の御岳山で自然観察会を実施しました。今年も募集してすぐに定員に達してしまった人気の観察会です。昨年度に引き続き、元御岳ビジターセンター解説員であり、現在は「東京の川と森」をフィールドに自然ガイドとして活動されている宮田 浩先生に講師をお願いしました。テーマは～東京の山間部に生息する哺乳類からのメッセージ～とし、ムササビの生活から見える森林の多様性の意義や、ここ数年御岳山で目撃が多発しているニホンカモシカとニホンジカの生息状況の違いなどを解説していただきました。さらに、地域の植生の変化などを題材として、フィールドワークを中心にSDGsの目標15である「陸の豊かさを守ろう」についても考察しました。さらに、途中で講師の宮田先生に導かれたかのように現れたニホンジカとの出会いや御岳山の宿坊の方との交流もあり、大変充実した自然観察会となりました。



らからのメッセージ～とし、ムササビの生活から見える森林の多様性の意義や、ここ数年御岳山で目撃が多発しているニホンカモシカとニホンジカの生息状況の違い

などを解説していただきました。さらに、地域の植生の変化などを題材として、フィールドワークを中心にSDGsの目標15である「陸の豊かさを守ろう」についても考察しました。さらに、途中で講師の宮田先生に導かれたかのように現れたニホンジカとの出会いや御岳山の宿坊の方との交流もあり、大変充実した自然観察会となりました。

食害により減りゆくレンゲショウマや、予想以上に進行している「ナラ枯れ」の状況を目の当たり



りにして、自然環境や生態系のバランスについて、その脆弱性を改めて認識しました。また、同じ青梅の学校に勤務している者として、子供たちへの

環境教育、特に自分たちの住む地域の自然環境に目を向けてもらうことの重要性を痛感しました。

◆研修報告2◆

東京都環境局主催・ 小学校教員向け環境教育研修会 「今さら聞けないSDGs～ 学校の中での推進～」

全国小中学校環境教育研究会 会長
東京都多摩市立連光寺小学校 校長 関口 寿也

東京都環境局が毎年夏季に企画している小学校教員向け環境教育研修会「やってみよう！環境教育プログラム」の全5回の講座のうち、第4回目の講座を全国小中学校環境教育研究会で担当しました。今回はオンライン研修の形をとり、「今さら聞けないSDGs～学校の中での推進～」と題し、学校教育活動の中にSDGsの視点をどのように生かしていけばよいのかという内容として、24名の参加申し込みを受け開催されました。

研修会前半は講義、後半は参加者間でのディスカッションを行いました。講義では、SDGsの背景、温暖化の現状、SDGsを達成するために不可欠なESDの推進方法、全国の実践や東京都小中学校環境教育研究会研究部が味の素(株)と協業した学習プログラムの実践を紹介しました。講義の後の後半のディスカッションは本講座のメインとなるものです。参加者は3グループに分かれ、自己紹介と勤務校で課題となっていることを挙げてもらいました。「SDGsに取り組まなければいけないと思うのだけれど、どう考えたらよいのか」「校内の教員間の合意形成をしたい」等の声が多く挙がりました。

その中で見えてきたこととして、教育活動の中でSDGsに取り組む上で大切なことは、SDGsを学ぶということではないということです。日々の教育活動の中で行っている環境教育によって得た価値観や知見が、SDGsとどう繋がっていくのかをクリアにすることが肝心です。SDGsはGoalなのです。私たちが日々の暮らしで思い、考え、僅かであっても実践していることが結果としてSDGsに続いていくことを意識させていくことこそが、自己有用感や自己肯定感を育てることに繋がりが、未来の地球を創造する希望の光となるはずです。環境教育、ESDは、そのために学校教育に不可欠なものであると参加者が改めて実感することができた研修会となりました。研修会での学びを自校の教育実践に生かすことができるよう願ってやみません。

◆研修報告3◆

スチール缶製缶工場・リサイクル見学会 ～さいたま市桜環境センター、 東洋製罐(株)埼玉工場 見学～

多摩市立鶴牧中学校 副校長 天野 拓二

夏真っ盛りの8月8日(火)、スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・(公社)日本缶詰びん詰レトルト食品協会主催、(株)教育家庭新聞社協力、東京都小中学校環境教育研究会後援の「スチール缶製缶工場・リサイクル見学会」を実施しました。当日は教職員19名が参加し、リサイクルの意義、スチール缶の特徴などを学びました。まず、午前中に向かったのは、さいたま市の桜環境センターです。この桜環境センターはごみ・資源の処理施設であり、1日あたり、ごみ収集車180台分のごみが集まります。ごみ処理の際に発生する熱エネルギーを利用した発電を行っており、センター内で利用するなど、電気の地産地消、効率的なエネルギーの循環を実現しています。また処理後に発生するスラグやメタルなども再利用されます。また、この桜環境センターには処理熱を利用した大浴場やプールなど、地域住民が利用できる複合施設を併設しており、これまでごみの処理施設というどちらかといえばマイナスなイメージがある施設を逆に市民の方々から喜ばれる施設に変えている点など、環境問題の意識を高めることも含め、大変興味深く、新たな視点を感じた良い経験となりました。午後には東洋製罐(株)埼玉工場を見学しました。この工場は1971年に設立された飲料容器専門の工場です。今回はその中でも最新の技術の詰まったスチール缶の製造現場を見ることが出来ました。製造方法の工夫や技術を高めることで環境問題に対応した工場となっています。こうした身近にあるものに触れることで、改めて環境問題について考えるきっかけとなっただけではなく、製品の品質についての私たち消費者の意識と企業努力とのバランスをとることの必要性を感じました。今回、この2つの施設を実体験として見学できたことは、子供に伝えることはもちろん、私たち自身が、子供たちが希望をもって生きていける環境を作り、守っていくという使命をもち、決して諦めることなく行動していかなければならないことを改めて感じた時間となりました。考えるだけでなく行動すること、残された時間は決して多くはありません。

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進 ～環境教育によって育む学力と環境保全意欲～

東京都小中学校環境教育研究会

I 研究主題設定の理由

本年7月、世界気象機関(WMO)と欧州委員会の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス」は、7月が人類史上最も暑い月となることを裏付ける公式データを発表した。これを受け、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は、国連本部での記者会見で「地球温暖化の時代は終わりました。地球沸騰化の時代が到来しました。もはや空気は呼吸するのに適していません。暑さは耐えがたいものです。そして、化石燃料で利益をあげて気候変動への無策は容認できないものです。」と発表し話題となった。また、東京では夏日(気温25度以上)が積算143日を記録した。1年の約4割が夏日となったことになる。まさに「地球沸騰化」と言っても過言はない。

これまで東京都小中学校環境教育研究会は、人間の行き過ぎた社会活動が引き起こした環境問題に警鐘を鳴らし、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を進めてきた。

子供たちの多くは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、環境保全意識が高まってきているように思われる。一方、実生活ではペットボトル飲料やファストファッションを無意識に手にしている状況にある。その現状を踏まえ、「地球温暖化」を実感している今だからこそ、地球温暖化防止に焦点をあて、授業実践を続けることでさらに環境保全意識を高めていく必要がある。

これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成
- 2 本研究会で作成した「新しい環境教育」でしました児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、研究部において授業開発、授業実践を行う。
- 3 研究発表校、研究部員所属校、外部機関と連携し研究実践を深める。

【児童・生徒に身に付けさせたい

3つの能力・態度】

- (1) 地球とそこに生きるすべての生命にとってよりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 4 全国小中学校環境教育研究会の発表(令和6年1月26日)において、研究発表を行う。

III 研究の過程

- 1 学校現場でのESDの推進状況の確認
- 2 昨年度の研究成果の検証
- 3 地球温暖化を考えるための教材、単元、授業開発
- 4 研究部員の学校における授業実践
- 5 ポートフォリオによる授業検証

IV 単元例 第4学年 総合的な学習の時間

「グリーンカーテンプロジェクト」(一部抜粋)

小 単 元	1学期までにグリーンカーテンの意味や観察などを含めて 7時間実施済み	
	学習過程	◎目標
1 地球 温暖 化に 対し て自 分た ちで でき ること	【本時】 (2時間) 課題設定	◎グリーンカーテンが上手くいかなかった原因について関心をもつ。 ◎100年後の気温を考えさせ、地球温暖化について関心を持ち、活動の計画を立てることができる。
	(2時間) 情報の収集	◎地球温暖化について調べたいことや疑問に思ったことを、調べることができる。
	(1時間) 整理・分析	◎調べたことをどのように整理するか計画を立てることができる。
	(2時間) 表現・まとめ・振り返り	◎調べたことを他者に伝えることができる。 ◎振り返りを基に課題を更新し、見直しをもつことができる。

IV 成果と課題

【アンケート結果(一部抜粋)】肯定的回答率の変容

質問項目	事後-事前
①地球温暖化は身近な問題だと思いますか。	3.9%
②地球温暖化の原因について知っていますか。	7.8%
③地球温暖化を他の人に説明することができますか。	12.4%
④地球温暖化や異常気象を実感していますか。	1.6%

【成果】

- ・アンケート結果から児童・生徒の地球温暖化が身近な問題であるという認識が高まった。
- ・地球温暖化防止策について、他の人に説明することができるという児童・生徒が増加した。

【課題】

- ・地球温暖化防止対策について、難しく捉えてしまう児童が一定数いるため、より自分事として捉えさせる工夫が必要となる。

第26回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール

『みんなで作ろう持続可能な社会』

『みんなで守ろう豊かな自然』

今回で26回目を数える全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクールが予定通り実施できました。コロナ禍が収まり、ようやく通常の学校生活に戻ってきた中での開催です。地球温暖化の進行が肌で感じられた昨夏、こうして環境絵画コンクールを無事開催できたことは改めて意義深いものだと感じます。ご協力いただきました関係省庁や学校現場、関係団体、協賛企業の皆様に改めて御礼申し上げます。

このコンクールは、「絵を描く」という子どもたちにとって身近な方法を通して、環境への意識を高め自分たちの行動そのものが地球規模の環境の保全につながるということを意識してほしいとの願いから開催しているものです。

『みんなで作ろう持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』の2つをテーマとして、文部科学省、環境省、日本環境協会の後援をはじめ、(株)みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、丸紅(株)、積水化学工業(株)の協賛をいただき、全国の児童・生徒を対象に5月下旬から9月11日までの期間で募集をしました。また、第22回からは環境大臣賞の受賞作品が環境省の環境白書の表紙絵にも選定されています。

今年度は募集期間中に、小学校の部は219団体2935作品、中学校の部は290団体1744作品、合計509団体4679作品が、北海道から沖縄県まで全国各地から送られてきました。応募作品数は前回は下回りましたが、応募団体数は上回り、各学校や団体で児童・生徒への声掛けを多くしていただいたことが伺えます。これはひとえに環境への意識が高まってきていると言えるのではないのでしょうか。本コンクールの活動が、そんな地球環境への危惧の意識向上に寄与できているのであれば、開催している意味があるというものです。

児童・生徒はもちろんのこと、指導する教員側の環境に対する意識は今後さらに向上させていくことが不可欠です。児童・生徒の興味関心や創作意欲は、明日の地球環境を保全する実践力として昇華していくはずです。このコンクールが、そんな未来を創造する懸け橋にならんことを願ってやみません。児童・生徒を文化的・創作的な活動に

導いていただく環境を用意していただいた教育行政関係者をはじめ、協賛企業、関係団体様のご支援があったることと改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

【応募作品について】

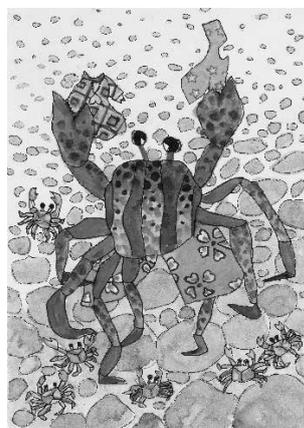
主に次の基準に沿って審査を行いました。

- テーマに沿っている
- 児童・生徒の意見や願いが分かる
- デッサンに工夫がある
- 他の作品の模倣や類似ではない
- その他、人権上の配慮 など

審査終了後、審査委員長の秀明大学 内野 薫先生からは、応募作品の発想とクオリティに感心しましたとのご講評をいただきました。斬新な構図や技術的に高度で丁寧に仕上げている作品も多く、日常生活で地球環境に対してどのように取り組むかということをお伝えしようとする姿勢も伝わってきました。

審査の結果、小中学校別に、文部科学大臣賞、環境大臣賞、会長賞、みずほ特別賞、明治安田生命特別賞、丸紅特別賞、積水化学特別賞（以上各1点ずつ）、佳作（小中各10点ずつ）のほか、学校賞として大阪府 吹田市立千里第三小学校、千葉県 流山市立南部中学校の受賞が決まりました。

【第26回会長賞作品】（本研究会HPに紹介）



〈京都府京都市立
嵐山東小学校3年〉



〈千葉県流山市立
南部中学校2年〉